に起こりやすい病気

文＊岩崎雅和先生（岩崎動物病院）
イラスト＊石崎伸子
参考資料＊アニコム損害保険㈱
家庭どうぶつ白書

くりくりの大きな目が特徴のシー・ズー。繊細で頑固なところもあるものの、賢く温和な性格で被毛が抜けにくいなどの特徴が、ペットとしての地位を揺るぎないものにしていることは間違いありません。シニア世代にも人気があるようです。

今回は「アニコム家庭どうぶつ白書」の疾患統計に基づく起こりやすい病気の順位や当院でのデータを参考に、ランキング形式で学んでいきましょう。シー・ズーによく見られる病気を知っていただき、日々の生活で気を付けて、健康ですてきなワンコライフを送ってほしいと思います。

2位 皮膚の病気

「アレルギー性皮膚炎」や「アトピー性皮膚炎」は、非常に多くのシー・ズーに認められます。皮膚が赤くなったり、小さなポツポツやその周囲の赤み、脱毛などが見られたときには注意が必要。目や口の周り、内股、脇の下、指のあいだ、肛門周りなど皮膚の弱い部分に症状が出やすいです。そのほか「外部寄生虫感染（ノミやダニ）」や「膿皮症」、「腫瘤性病変（できもの）」も多く認められます。

対処 「発赤」、「ポツポツ」、「脱毛」程度の症状しか皮膚には現れませんので、見た目で原因を特定することは簡単ではありません。3日以上症状が継続するようなら、動物病院に相談することをお勧めします。

予防 患部をなめたり、掻きむしったりすると悪化することがあるため、動物病院で受診するまではエリザベスカラーを着けておくと防止できます。

1位 耳の病気

耳の病気もさまざまですが、とくに「耳炎」が多く認められます。なかでも鼓膜よりも外側の「外耳炎」が多く、この発生は「好発因子」と「原発因子」によって左右されています。

「好発因子」とは、耳の入り口から鼓膜までの耳道の湿度が高くなるような「垂れ耳」、「耳の毛がびっしり生えている」、「耳道が狭い」などの、病気を起こしやすくする要素のこと。「原発因子」とは、寄生虫、異物、腫瘍、基礎疾患（アレルギーやホルモン異常）などの原因のことを指します。

垂れ耳で耳の毛も多いという好発因子を持つシー・ズーは、さらに原発因子となるマラセチア感染症、膿皮症、脂漏症やアレルギー性皮膚炎を抱えている犬も多いため、外耳炎にかかる確率が高くなっています。外耳炎は非常にかゆいため、耳をしきりに掻く、頭を何度も振るという症状が見られます。放置すると出血や化膿、痛みが生じるので、さわると嫌がるようになります。

対処 耳を気にするそぶりをしたり、耳垢が溜まっているようなら、すぐに動物病院へ行きましょう。その際は、アレルギーの有無を調べるためにいつも食べているものを持参したり、思い当たる原因をまとめて話すと、診断の手助けになります。

予防 ふだんから愛犬の耳のニオイを嗅いだり、耳垢、赤みや腫れがないかをチェックしてください。綿棒などで耳の中をゴシゴシこすってしまうと、外耳炎の原因となることもあるので注意。アレルギー検査をして原因を特定するほか、月に1度はトリミングサロンで耳のケアをしてもらうのも効果的です。

覚えておきたい シー・ズーに起

4位 消化器の病気

消化器疾患は、一般的にどの犬種でも多く見られる病気です。食欲不振、嘔吐、下痢、腹痛などさまざまな症状を示します。単なる食べすぎや食事を変えたことだけでなく、細菌、ウイルス、寄生虫などの感染症、異物・薬物の摂取や食物アレルギー、腫瘍なども原因となります。元気がなくなったり、食欲が低下することに伴って急な下痢や嘔吐などの症状が見られたり、それが慢性的になった場合は何かしらの腸炎を疑ってください。

遺伝的には、上あごに亀裂ができて口と鼻がつながってしまう**「口蓋裂」**や肝臓の血管異常である**「先天性門脈体循環シャント」**、胃の出口が狭くなり食べたものを上手に腸に送れない**「幽門狭窄（幽門洞肥大症候群）」**などが発生します。

対処 犬の状態を観察すると同時に、獣医師による正確な診断と治療を受けてください。目安として、吐き気であれば3回以上、下痢であれば2回以上、また症状が2つ以上（たとえば食欲不振と下痢など）重なって見られたら、迷わず動物病院へ。その際に、排泄物などを持参したり画像に収めたものを持っていくと、診断しやすくなります。

予防 異物の誤食防止や食事の管理、体重管理、消化管内寄生虫予防などに十分注意してあげて下さい。

3位 目の病気

シー・ズーの約30～40%は何らかの目の異常を持つとされています。特徴である突出した（眼窩の浅い）大きな目では、遺伝性疾患や先天性または後天性の疾患の発症がよく見られます。

遺伝性疾患では**「難治性角膜損傷（目の傷）」**、**「白内障」**、**「原発性緑内障」**、**「網膜剥離」**、**「色素性角膜炎」**、**「眼瞼内反」**、逆さまつ毛の**「睫毛重生」**、ドライアイの**「乾性角膜炎」**、**「硝子体変性」**などが知られています。

逆さまつ毛や、いつも目が半開きになっている**「露出性角膜症」**がある場合は、角膜に傷がつきやすいこともあります。また、シー・ズーの約3%は網膜剥離を起こすといわれています。

対処 「白目が赤い」、「ショボショボしている」などの症状があれば、迷わず動物病院へ。目やにが多い場合は、ドライアイかもしれません。緑内障の疑いがある場合は、すぐに眼圧を下げる治療を受けてください。
これだけ多くの遺伝的要因を抱えているため、一見して異常がなさそうでも年1回の定期健診を受けたほうが良いでしょう。検査は一般的な動物病院よりも、眼科を得意とする獣医師に診てもらうとより安心です。

予防 目の異常の治療では、多くは点眼薬が必要となります。ふだんから目の周りをさわられることに慣らしておくと便利です。

6位 腫瘍性の病気

一般的なペットの犬の寿命は、10年前に比べると1～2歳ほど延びる傾向にあります。シー・ズーもほかの犬種と同様、高齢になれば「腫瘍性疾患」の発生率は高くなってきます。体表にできるものだけでなく、体の中にも腫瘍ができます。腫瘍は、時に発生したその臓器の機能を奪うため、命にかかわることがあります。また、その症状もさまざまです。

遺伝的にも多くの腫瘍性疾患が発症することが知られており、「皮脂腺腫瘍」、「肛門周囲腺腫瘍」が多いように感じます。また部位別では、脳下垂体、汗腺、耳道腺などの組織に腫瘍が発生しやすいことが知られています。

肛門周りに腫瘍ができ、出血している状態（シー・ズー）。

対処 気になるしこりを見つけた場合には、動物病院で手術も含めた検査・治療について相談しましょう。もしも肛門周囲腺の腫瘍がメスに見られたら、悪性の可能性が高いため注意が必要です。

予防 残念ながら、遺伝的要因の多い腫瘍性疾患を完全に予防する方法はありません。「早期発見・早期治療」を合言葉に、5歳を超えたら、年に1度の定期検診を積極的に受けましょう。費用が許すのであれば、CTやMRIといった画像診断も検査項目として検討してみてください。

5位 泌尿器の疾患

一般的にどの犬種でも多く見られる病気ですが、「尿路結石」の発生とその種類はほかの犬種よりも多いようです。

泌尿器疾患は、腎臓、尿管、膀胱、尿道の異常によって起こります。主に尿の色やニオイ、尿の回数や量の異常が見られます。なかでも「膀胱炎」、「腎不全」、「尿路結石」などにたびたびかかることがあります。泌尿器疾患の原因には単なるストレス性のものから、結石のできやすい体質、細菌感染や腫瘍によるものまでさまざまです。

遺伝的には、生後数カ月～5歳ごろに「慢性腎不全」を発症する「家族性腎疾患（腎形成不全）」や「腎性糖尿病」という病気もあります。また、尿酸塩やシュウ酸カルシウムなどの各種結石が見られます。

対処 最も注意が必要なのは、「尿が1日じゅう出ない」という症状です。この場合は、すぐに動物病院を受診しましょう。

予防 排尿を我慢させると、膀胱内で細菌が増殖し、膀胱炎を引き起こす原因ともなります。結石ができやすい体質の犬は、決められた食事以外は与えないようにして、定期的に動物病院へ連れて行きましょう。初期の腎不全では症状はほとんどありませんので、年に一度は定期健診を受けるようにしてください。

topic 短頭種飼い主の心がまえ

シー・ズーやF・ブルドッグ、パグといった鼻先が短く、眼窩が浅い短頭種には、目だけでなく皮膚や耳の病気も起こりやすくなっています。これは、おそらく短頭種が生み出された遺伝的背景に関係があるように思われます。

しかし、それらの遺伝的問題を解決しようとすると、短頭種が今ある状態とは変わってしまうことが想像できます。ですので、飼い主さんには短頭種を飼おうと考えた段階から、よく見られる病気について知ってほしいと思います。これらの病気を怖がるのではなく、病気が発症するかもしれないと覚悟して、なるべく早期に発見し、予防・対応・治療をして、それぞれの遺伝性疾患と向き合っていく姿勢が必要です。そのためにも、定期的な健診を受けるようにしてください。

8位 筋骨格系の病気

「足を引きずる」、「足を上げる」、「立てない」、「震える」などの症状があれば、筋肉や骨の病気があるかもしれません。

シー・ズーは遺伝的に軟骨の形成が弱い犬種であるため、四肢や頭蓋骨の発達がアンバランスになり、頭だけ大きくて手足が短い体型の**「矮小症」**が認められます。ほかの犬種では疾患とされる矮小症ですが、シー・ズーでは容認されています。

また**「椎間板疾患」**、**「股関節形成不全」**、**「膝蓋骨脱臼」**なども、同じ遺伝的背景のためよく遭遇します。椎間板疾患は、3～7歳で発症します。痛みによりふだんとは異なる姿勢でうずくまっていたり、食欲不振や排便姿勢を嫌がるなどから、下半身の麻痺まで症状はさまざまです。

「股関節脱臼」や膝蓋骨脱臼は、各関節の先天的要因と滑りやすい床などの環境的要因によって起こります。最初に脱臼したときには痛みが出ますが、何もしなくても整復され、痛みは数日で治まります。ただし、1度外れると何度も外れるようになります。スキップのように片足を上げながら走る場合は、この病気が疑われます。

股関節形成不全のシー・ズー。右足（向かって左側）の股関節の形成に異常があり、不安定になっている。

対処 多くの筋骨格系疾患は手術や痛み止め、サプリメントなどの投薬が必要になります。すぐに動物病院を受診できない場合は、まずは安静に。ただし麻痺している場合は、一刻も早く動物病院で治療を受ける必要があります。

予防 事故防止のために、滑りやすい床などがあれば、滑らない床材やワックスなどを利用して改善しておくことをお勧めします。犬の歩き方に注意し、動物病院での定期的なチェックも欠かさずに行って下さい。また、健康なうちにトレーニングをさせて関節や背骨に負担をかけずに筋肉を鍛えると、発症予防につながるようです。

7位 循環器の病気

加齢とともに、心臓も徐々に弱っていきます。愛犬に「遊びたがらない」、「すぐ疲れる」、「乾いた咳をする」などの症状が見られたら、心臓に不具合が生じているかもしれません。

遺伝性疾患としては、**「心臓奇形（心室中隔欠損）」**や**「弁膜症（僧帽弁閉鎖不全症、三尖弁閉鎖不全症）」**などが知られています。心室中隔欠損は心臓の左右を分ける壁に穴が開いたまま生まれてしまう、まれな先天性疾患です。初めてのワクチン接種などの診察時に発見されます。

弁膜症は、心臓にあって血液の流れを一定にする弁（僧帽弁、三尖弁、肺動脈弁、大動脈弁）が、高齢になるにつれうまく機能できなくなる疾患です。とくにシー・ズーは、遺伝的に僧帽弁が役割を十分に果たせなくなる危険性があります。

対処 心疾患があり咳が出る場合はおそらく病気が進んでいますので、早急に動物病院で診察を受けてください。聴診だけでなく、定期的にレントゲン検査や超音波検査、血液検査、心電図検査も実施し、必要な薬を処方してもらいましょう。

また、無理のない散歩や一定の湿度と温度を保つ環境づくり、必要であれば酸素室（レンタル会社から借りるのが一般的）を用意して、愛犬にストレスの少ない生活をさせてあげましょう。

予防 完全な予防法は残念ながら見つかっていません。定期的に検査を受けて病気を早期発見できれば、適切な時期に治療を開始することで病気の進行を遅らせたり、症状を抑えることが可能です。